

作品タイトル 心配の種

著者名 北嶋征生

あらすじ

郵便配達員の夫が仕事中に転倒し、救急で運ばれたと聞き、妻は慌てて病院へ駆けつける。夫はこれまで何度も怪我をし、その度に妻に心配をかけてきた。包帯姿で妻を迎えた夫は、「大丈夫」と言つて妻を安心させるが、そこには長年連れ添った妻への、意外な嘘と芝居が隠されていた――。

本編文字数

4998文字

看護師さんに案内され、私は外科病棟の三階にあるというデイルームへ、足早に向かった。院内の廊下は暑くも寒くもなく、適温に調整されていた。先ほど測った体温も平熱だった。けれども私の全身は、不安と動揺と苛立ちでのぼせるほど茹だっていた。

郵便配達員の夫が路上で頭を打ち付け、救急で病院へ運ばれたのは今回が初めてではない。これまでも、配達中にバイクで何度か転倒した。

一人で歩いている時に躓いて転んだこともあった。自転車で車と接触して突き飛ばされたこともあった。その度に、連絡を受けた私は、血相を変えて病院へ駆けつけたのだ。

不幸中の幸いか、どの事故も致命傷に至ることはなかった。それでも、頭や顔を包帯で巻かれた痛々しい姿を見たり、一時的に意識を失って事故の前後の記憶が飛んでしまったりする夫を目の前にするだけで、私はいたたまれず、胸が張り裂ける思いをしてきたのだ。

大きな窓から入る日射しで、広々としたデイルームは、眩しい位に光で溢れていた。四人がけのテーブル席がいくつも並び、入院患者たちがそれぞれのテーブルで、面会に来た家族や知人と話している。

「やあ、ここ、ここ」

窓際のテーブル席で、パジャマ姿の夫が座ったまま弱々しい声で私を呼んだ。頭と右手に包帯を巻いている。

「ちよっと、大丈夫なの？」

私は、夫の穏やかな笑顔を見て、少しだけほっとしながら席に着いた。

「ああ、大丈夫。ちょっと頭を打って、肘にひびが入ったくらい」  
呑気な口調で夫が答える。彼はいつもこんな調子だ。良く言えば楽観的。悪く言えば現実逃避。

まあ、深刻になりすぎて落ち込んでしまうよりは、ましなのかもしれないが。その分、私が極度の心配性だから、ある意味バランスがとれた夫婦なのだ。

「それで、今回は何があったの？バイクの事故？」

「いや、それがよく憶えていないんだよ」

なんとも頼り気ない夫の答え。

「えっ、バイクに乗っていたかどうかも憶えていないの？」

「うん、気がついたら病院のベッドの上で……」

「頭の傷は？」

「ちよっと後頭部にたんこぶの小さいのができているぐらいかな」  
夫が、指さしながら答える。

「痛くないの？」

「ああ、今は全然痛くないよ」

私は胸をなで下ろす。けれどすぐに心配になって夫に訊ねる。

「精密検査はした？主治医の先生はなんて言ってるの？」

「ええと、検査……検査……。ああ検査はいろいろやっていたよ」

「それで？」

「うん、今のところ、特に問題ないみたい……」

「ほんと？」

私は夫が心配をかけないよう嘘をついているのではないかと勘ぐった。夫にはそういう優しいところがある。でも今はそういった優しさはかえって邪魔だ。どんなに深刻であっても、事実は事実として、正面からしっかり受けとめなければならぬ。夫婦が力を合わせて困難に立ち向かうには、まずはそれが必要不可欠なのだ。

「本当に大丈夫？先生からちゃんと説明を受けたの？」

「ああ聞いた。聞いた」

夫が額を指で擦りながら答える。嘘をついている時のいつもの癖だ。

「嘘でしょ」

「本当だってば」

「じゃあ主治医の先生を呼んできてよ。私も直接、検査結果とか、病状とか、今後の見通しとか、いろいろ説明を聞きたいから」

「あー、えーっとね、主治医の先生は、今日は外来で他の病院に出

掛けているからいいんだ」

「何それ。そんなことあるの？」

「最近の病院は、お医者さんのやりくりも大変なんだよ」

夫が生半可な知識でわかったようなことを言う。これもいつものことだ。

まあいい。先生のことは後回しにしよう。それより、うつかり置いてきぼりにしていたけれど、そもそも怪我の原因が何だったのかをつきとめなければ。

「救急車は誰かが呼んでくれたの？」

「うん、そうみたい」

夫は質問が変わって、ややほっとしているように見えた。

「あなた、その時どこにいたの？外、それともどこかの建物の中？」

「うーん、それもはっきり憶えていないんだよね」

「救急車を呼んでくれた人の連絡先とかは？」

「わからない……」

他人事みたいに頼りなさに答える夫に、私は頭を抱えた。

こういう夫を見ている時、私は妻というより、出来の悪い弟を持つ姉のような気分になる。

実際の私に兄弟姉妹はいなかったけれど、たぶん弟がいたら、その存在というのはこんな感じだろうと思わせる雰囲気は夫にはあった。

もちろん私が夫より二つ年上なことや、私たちには子どもがいなかったことも、大きな要因かもしれない。

弱々しくて、時々生意気で強がりでもいつも心配をかける存在。それが度を過ぎると私は、弟どころか息子を思う母親の気持ちにさえなってしまうのだ。

「それじゃあ、真相をつきとめようにも、何も手掛かりがないわね」  
私は腕組みをして天を仰いだ。ごちゃごちゃになりかけた頭を整理する。

そうしているうちに二人の会話は途切れ、しばらく沈黙が続いた。

やがて、夫が口を開いた。

「手掛かりかあ……」

相変わらず脳天気な夫。まあそういうところが可愛くもある。だが、続いて出てきた夫の言葉に、私は一瞬、頭の中が真っ白になる気がした。

「もしかしたら、事故じゃなくて事件かも……」

「事件って、一体どういうこと？」

私は、困惑しながら夫に訊いた。

「例えばの話だけれど、誰かに殴られて気絶した可能性だって考えられるわけでしょ」

夫が急に真顔になった。下手な役者みたいに芝居がかっている。けれども、確かに言われてみれば、その可能性はゼロではない。そして万が一、そんなことが起きていたのだとしたら、事態はただの事故よりよっぽど深刻だ。

私はふいに湧き上がってきた胸の動悸を鎮めようと、何度か深呼吸を繰り返した。そして、できるだけ冷静になって夫に訊いた。

「何か当たりがあるの？ 誰かから恨みを買うようなことか……」

「いや、全然」

夫は、包帯を巻いた頭を左右に振って否定した。

「職場で、パワハラや、いじめとかは？ 同僚とか上司とかに、変な奴はいない？」

「いない、いない。至って平和な職場だよ」

「じゃあ、どうして殴られたのかもなんて言うのよ」

私は少々むっつとして言った。

「別に恨みを買わなくても、殴られることはあるでしょ」

子供がすねるように、夫が答える。

「ああ強盗とか？」

「そうそう、そっち系」

夫がはにかむ。

なるほど強盗か。それならつじつまが合うかもしれない。第一、こんな人畜無害のひとが、誰かさんから恨みを買うなんてことはあり得ない。

「何か盗まれたりしてない？ 財布とか、貴重品とか」

「えーっと、財布は確か病室の鞆の中にあつたよ」

「財布の中身は？ ちゃんと確認した？」

「あ、中はまだ見てないかな」

出た。このひと。本当に肝心なところが抜けている。だから私がないとだめなんだ。

「とにかく、後ですぐ確認してね」

「はい、はい」

夫が包帯をした腕で頭を搔く。

「どっちにしても私、あなたを殴った奴、絶対に許さないから。必ず見つけ出して、仇を討つよ」

「あの、まだ殴られたと決まったわけじゃ……。それに俺、殺されたわけじゃないし」

夫が、苦笑する。

「打ち所が悪かったら、死んでたかもしれないでしょ！」

私は興奮して思わず立ち上がった。その拍子に椅子が倒れて、デイルームにボタンという音が鳴り響いた。

談笑していた人々が、一瞬こちらを見る。焦った私は、すぐに振り返って、視線を椅子の方に向けた。すると、どこからか看護師さんがやって来ていて、椅子を元どおりに直してくれた。

「佐倉さん、そろそろお時間です」

看護師さんは、そのまま夫に向かって言葉をかけた。夫が無言でうなずいている。

「面会の時間、十五分間までなんだって」

夫が情けない笑顔を見せて、私に言った。

「十五分？ たったそれだけしかないの？ 面会時間」

私は驚いて夫に訊いた。

「うん、コロナとかいろいろあつて、そうなってるんでしょ」

「コロナ？ 何それ、よくわからないけど……」

「あ……。まあ、ともかく、今はそういう決まりになっているみたいなんだ」

夫が少し困り顔で言う。

「そっか。わかった。じゃあ今日のところは帰る。何か必要なものとかある？ 明日また来るから、その時に持ってきてあげるけど」

「うん、とりあえず今は大丈夫かな」

「スマホは？ 充電器とかある？」

「あ、充電器ない。明日、持ってきて」

「オッケー。あとは大丈夫？」

「うん、たぶん大丈夫……」

どこまでも頼りないひとだな。

私が護ってあげないと。

このひとには私しかないんだから。

「何かあったら、すぐメールしてね」

「うん、ありがとう」

弱々しく手を振る夫の姿を、私は何度も何度も振り返って確かめながら、デイルームをあとにした。

\*

デイルームを出ていく妻の姿が、完全に見えなくなった。代わりに、妻に付き添っていた看護師さんが私のところにやってきた。

「奥様、今、お部屋に戻りましたよ」

「ありがとうございます」

私は看護師さんにお礼を言い、頭や腕に巻かれた包帯を素早くほどいた。

「今日はどうでしたか。いろいろお話できました？」

看護師さんが私に訊ねる。

「ええ。今日は、いつも以上にたくさん話ができたといい感じがします」

「それはよかったです。今、預かっていたお荷物をお持ちしますね」  
看護師さんはそう言うと、再びデイルームを出て行き、数分後に私のリュックサックを抱えて戻ってきた。

私は礼を言いながらリュックサックを受け取った。チャックを開け、私服を取り出すと、速やかにパジャマから着替えた。

「いつもお付き合いいただいて、本当にありがとうございます」

私は深くお辞儀をして、改めて看護師さんに感謝の言葉を述べた。

妻が認知症を発症したのは、五年前のことだった。ちょうど私が定年を迎え、これから二人でのんびり暮らしていこうとしていた矢先のことだ。

日々進行していく妻の症状が重くなってからは、病院に併設された、こちらのケア施設でお世話になっていた。

今の妻は、自分の名前も思い出すことができない。そして、私が誰であるかも――。

だが、そんな妻と奇跡的に「夫婦」として会話が成立する話題が一つだけあった。それは、私が大怪我をした時の出来事に関わることだ。

郵便配達員として日々バイクを運転していた私は、どこか注意力が散漫なところがあり、何度か転倒して大怪我を負った。

仕事以外でも、一人で自転車に乗っている最中や歩いている時に、何かに接触したり躓いたりして転んだこともあった。

ひどい時には、頭を打ち付けた拍子に一時的に意識を失い、救急車で運ばれて病院で目覚めるといふこともあった。

その度に私は、病院に呼び出された妻を動揺させ、随分と心配を掛けてしまった。

頭を打った前後の記憶も飛んでしまい、事故だったのか事件だったのかももうやむやになった時には、事件だと思込んだ妻が、泣きながら「絶対に仇を討つ」と取り乱す一幕もあった。

私たち夫婦の人生は概ね平穏で穏やかなものだったけれど、数年

に一度、こういった災難にも見舞われた。

その時の出来事は、二人にとって辛く痛々しいものでしがなく、できれば二度と思出したくないものだった。

ところがある日、認知症が進んだ妻に、ふとこの話題を投げ掛けた時、彼女がその時のことをよく憶えていて、「妻」として私と話をし始めたのだ。

驚いた私は、それ以来、妻と面会する度にこの話題を持ち出した。今では施設の看護師さんたちの協力も得て、当時、私が入院していた際の包帯姿に扮して、彼女と会話をしている。そうすると、妻はより鮮明に当時の記憶を思い返してくれているような気がするのだ。

時折私は、今日みたいに悪のりして、「事故ではなく、事件が起きていたのでは」と、敢えて妻に謎めいた表情で言葉を投げかけたりもする。ミステリー好きだった妻と、それをきっかけに夫婦の会話が弾むことを期待して――。

そんな私の企みは、功を奏する時もあるれば、空振りに終わる時もある。基本、怪我に纏わる彼女との会話は、同じような内容の繰り返しだ。

それでもいくつかの大怪我の記憶のおかげで、私たちは面会をする度に、これまでの人生の機微や、お互いの性格や口癖などを、少しずつ振り返ることができている。

妻にとっては心配の種でしかなかったであろう当時の思い出たちは、今や私たち夫婦にとって、かけがえのない宝物に違いなかった。

「もう、これ以上、心配かけないでね」

怒り顔で、そんな言葉を口にする妻の様子を思い浮かべながら、私はそっと呟いた。

「あと少しだけ、心配をかけさせてもらおうよ」